

日付:2014年12月7日／聖書:ルカによる福音書1:5～25

主題:「黙して迎える」

アドベントの二週目を迎える。ルカ福音書のクリスマス物語である。ザカリアは選ばれた祭司として聖所で香をたく。その務めには、宗教的儀式として人間の側が、神を喜ばそうとする業に陥りやすくなる。神に仕え、神に捧げ物や香をたいて神に喜ばれることをするのが宗教であると思いがやすい。しかし神は、ザカリアに天使を遣わす。神のために人間が何かしていくとっていたのに、神の方から近づいてこられたのである。このことは、私たちの住むこの世界に、神の国の業を示していくことを神が決断され、実行したということである。実はこれが“アドベント”ということである。

アドベントとは待降節、キリストの誕生を待ちわびるとことだが、しかし、そもそもこの言葉の原意は、「到来」ということ。神がわざわざ私たちの側に来てくださる、私に出会うために「到来」されたということ。さらにこのアドベントは、「アドベンチャー(冒険する)」という言葉と同じ言葉から出来ている。神の側からすれば、人間の側へと出向くアドベンチャーとして、危険を冒して来られたということになるわけだが。神が危険を冒してこの世にこられたとは、どういうことなのか。それは、キリストは神でありながら人として生きる冒険をしたということである。死に至るまで、それも十字架の死に至るまで、神でありながら人として(フィリピ 2:6～)、痛みと悲しみと恐れとを、身に受けながらである。しかしそこに希望を示しつつ歩まれた。アドベントとは、そういう事の決断、始まりということである。

ザカリアは、天使との突然の出会いに恐れ、告げられた言葉に不安を抱く。聖書に「正しい人」(1:6)と評価されたザカリアにしてこの有様である。所詮人間は、たとえ「正しい人」と評価される者であっても、神の御業を前にすると、そういう人間の正しさはどこかに吹っ飛んでしまうもの。私たちはこの時期、サンタクロースを迎えることは喜んでする。それと同時に神を迎えることが出来るか。神を迎えるということは、自分が王であることを神に明け渡すことである。

ザカリアは、神の側の御業に圧倒され、ものが言えないほどに驚きを現す。神の御業を自らの事として迎えることは不安を覚えるものである。しかしここは、ザカリアが黙してその時を迎えたように、私たちもしばし黙して、神の出来事を迎えることが出来ればと願う。アドベントとは、キリストを喜び待ちわびると同時に、神が人と成られたその御業を、黙して考える事、深めていく事、そして私の中に迎える事である。(神谷)